

「生まれ育った島にもう一度帰りたい」

H様は、昭和8年11月に安芸郡蒲刈町（現在の呉市蒲刈）で生まれる。

蒲刈で結婚し、3人の息子を授かり、編み物の内職や牡蠣打ちの仕事をしながらか暮らしていた。

息子たちが成長し、H様夫婦は蒲刈を離れ、安芸区に住む次男宅の近くで生活を始めた。家の近くの畑で、野菜や花を育てたりしていたが、夫が10年前に亡くなる。

その後、H様は1人暮らしとなったが元気に暮らしていた。

H様は、84歳の頃から、通帳をどこに収めたか分からなくなったり、道に迷うなどの、認知症状が出始め、症状の悪化防止のため、近所のデイサービスを利用するようになる。

H様は、夜間の徘徊や奇声を発したり、強盗に入られたなどの妄想が始まり、近所の家の玄関に入ることもあった。

H様は1人暮らしが難しくなり、グループホームふじの家瀬野へ入居の運びとなった。

H様は持ち前の明るさで、ふじの家瀬野での生活は、入居者さんや職員とすぐに馴染めた。H様は、職員の手伝いや話をして、日中は楽しく過ごされるが、「今から、帰るけえね、出口はここね？」と帰ろうとされる事が、次の日も、その次の日も時間には関係なく続いていた。

H様 「島へ帰りたい」「島は、ええ所で」

H様の幼少は、海で泳ぎ、魚釣りやタコ捕りをしていた。海に面したみかん畑で友達とみかんを食べながら遊んだと、楽しく話しながら、涙される事もあった。

職員 「どうして帰りたいんですか？」

H様 「蒲刈は、家じゃけん帰るんよ。当たり前よ。」

「ここはどこね？呉は近いんか？ここから蒲刈は近いけ、すぐ帰る」

ある日、職員がH様に会いにふじの家瀬野に来られたH様息子様から、

「母には弟が居て、12年くらい会えていないので、生きてるうちに会わせてやりたい」という話を聞いた。

H様の「帰りたい」と、息子様の「弟に会わせたい」という思いを聞き、ふじの家瀬野の計画作成担当者とユマニチュード推進メンバーで話し合いを行い、H様がお元気なうちに故郷の蒲刈島に帰るとい夢を叶えるプロジェクトが始動した。

2024年1月、息子様に夢かなえプロジェクトについて説明をし、蒲刈に行って、弟様に合っ
て、新鮮なお刺身を食べるというスケジュールをお伝えすると、息子様は喜ばれ、一緒に同行し
たいと言われた。プロジェクトメンバーは、心強く思った。

2月にプロジェクトの実施を予定していたが、施設で感染症が蔓延し、予定を延期せざるを得
ない事態となった。

そして、息子様と予定を合わせ、2024年4月8日 月曜日にH様の「蒲刈に帰りたい」という夢
を叶える事が決定した。

4月8日 月曜日 9時

職員「今日は蒲刈へ帰りませんか？息子さんも一緒に来ますよ。」

H様「今から？蒲刈行くん？準備しちよらんでえ。」

職員はH様に着ていく服を選んでもらった。

H様「今日寒いって言いよったでえ。ようけ着とかんと！」

「ほんまに蒲刈行くんか？行く言うんなら、行くけど。」

半信半疑なH様も準備しながらソワソワし始めた。



4月8日 月曜日 10時。

息子様がふじの家瀬野へ到着。

息子様「ばあちゃん、行くよ！蒲刈、行こうで！」

H様 「あんた一、来たんね！ほんまに行くんか？行くいうなら行こうか！」

息子様の車に職員も同行し、出発する。

車中での会話、

息子様「いまから蒲刈行くけんね。甘夏採りに行くよ」

H様 「蒲刈の家行くん？今どうなっちょん？」

息子様「まだあるけどね、他の人に貸しとるんよ。中は見れんで。」

H様 「ほうね」

H様は車中で、息子様と蒲刈の家のことを話したり、外の景色見たりしていた。

1時間程で蒲刈島に繋がる安芸灘大橋を渡る。

H様 「海じゃあ、立派」

息子様「ばあちゃん、蒲刈で。今、渡ったんで」

職員 「Hさん、島に来ましたよ」

H様は、何も言わず海を眺められていた。



息子様から、職員に

「本当なら、弟と会う予定だったんですが、今入院しとるんですよ。

まだ、退院できんので、残念だけど、今日は弟に会わせてやる事が出来ません。」

このプロジェクトでは、H様と弟様が12年ぶりに会って、思い出の地を巡るはずが、弟様の体調が優れないため、予定が変更となった。

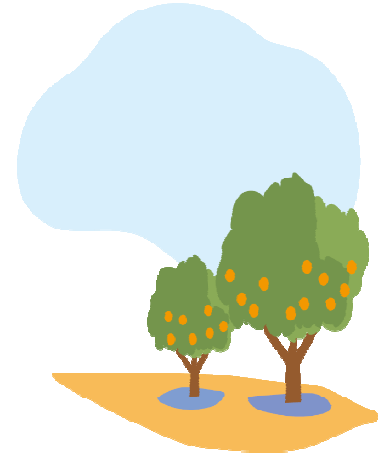
そして、H様の畑へ到着。

たけのこに向かって一直線に向かわれる。

「ええじゃない、はよ採りんさい！」

息子様「そりゃ美味しくないで。向こうにみかんが、ようけあるけ」

H様はみかんの木へ向かい、顔ほどの大きさの甘夏を素早く収穫する。



H様「ええのが、なっちょる。まだ向こうにもええのがあるで」

その姿は、まるで島に居た頃のH様の姿。

H様は、無我夢中でみかんをもぎ取った。

H様 「これが、美味いでえ」

H様は、年をとったんかもしれんと、石垣に腰を掛け、もいばかりの甘夏を食べながら話をされる。

H様は、石垣に生えている水仙を見て、

「嫁に来たときは少ししかなかったのが、これだけの株が出来たんじゃね」

と言い、職員に持って帰りんさいと大きな声で話される。

H様「ここからの景色が一番ええ。」と、前面に広がる隣島を懐かしそうに眺めておられた。



その後、昼食を食べに行く。

H様は、刺身定食を注文された。

H様「タコが美味しいんでえ、刺身のツマもうまいんで」

美味しい、美味しいと、何度も言いながら新鮮な刺身を召し上がる。



H様がワサビを多めに付けたのを息子様が見て心配すると、H様は、おどけて泣き真似をして見せた。蒲刈での昼ご飯を楽しみ、帰路へ就く。

ふじの家瀬野に戻ってきての第一声が、

「ここに、帰れんのじゃないかと心配しよった。あ〜、帰ってきた、ただいまあ」

この瞬間、H様の家は、蒲刈にもあるけど、今は、ふじの家瀬野が家なんだと職員は確信した。

H様が畑を見た瞬間、目がキラキラと輝き、みかんを力いっぱいもぎ取る姿を見て、息子様と職員は、「蒲刈に来てよかった」と思った。

職員は、H様と息子様の仲睦まじい会話や姿を見て、親子っていいなとつくづく感じた。

今日の出来事は、H様の記憶には残っていないかもしれないが、蒲刈での笑顔や会話は息子様と職員の記憶に刻まれた。

HC様 1933年11月生まれ（91歳 2024年4月8日現在）

プロジェクトメンバー

ふじの家瀬野 計画作成担当者

篠原瑞樹

ふじの家瀬野 ユマニチュード推進メンバー

河村真紀

夢かなえプロジェクト統括

阿波順子